

源氏物語

野分

紫式部

青空文庫

けぎやかにめでたき人ぞ在いましたる野

分あが開あくる絵巻のおくに

(晶子)

中ちゆうぐう宮のお住居すまいの庭へ植えられた秋草は、今年はことさら種類が多くて、その中へ風流な黒木、赤木のませ垣がきが所々に結ゆわれ、朝露夕露の置き渡すころの優美な野の景色けしきを見ては、春の山も忘れるほどにおもしろかった。春秋の優劣を論じる人は昔から秋をよいとするほうの数が多いのであったが、六条院の春の庭のなごめに説を変えた人々はまたこのごろでは秋の讚美者さんびになっていた、世の中というもののように。

中宮はこれにお心が惹ひかれてずっと御実家生活を続けておいでになるのであるが、音楽の会の催しがあつてよいわけではあつても、八月は父君の前皇太子の御忌おんきづき月であつたから、それにはばかつてお暮らしになるうちにますます草の花は盛りになつた。今年のわきの野分の風は例年よりも強い勢いで空の色も変わるほどに吹き出した。草花のしおれるのを見てはそれほど自然に対する愛のあるでもない浅はかな人さえも心が痛むのであるから、まして露の吹き散らされて無惨むじさんに乱れていく秋草を御覧になる宮は御病気にもおなりにならぬかと思われるほどの御心配をあそばされた。おおうばかりの袖そでというものは春の桜によりも実際は秋空の前に必要なものかと思われた。日が暮れてゆくにしたがつてしいたげ

られる草木の影は見えずに、風の音ばかりのつものつてくるのも恐ろしかったが、格子なども皆おろしてしまったので宮はただ草の花を哀れにお思いになるよりほかしかたもおありにならなかつた。

南の御殿のほうも前の庭を修理させた直後であつたから、この野分にもとあらの小萩が奔放に枝を振り乱すのを傍観しているよりほかはなかつた。枝が折られて露の宿ともなれないふうの秋草を女によおう王は縁の近くに出てながめていた。源氏は小姫君の所にいたころであつたが、中將が来て東の渡わた殿の衝立ついたての上から妻戸の開いた中を何心もなく見ると女房がおおぜいいた。中將は立ちどまつて音をさせぬようにしてのぞいていた。屏風びょうぶなども風のはげしいために皆畳み寄せてあつたから、ずっと先のほうもよく

見えるのであるが、その縁付きの座敷にいる一女性が中將の目にはいった。女房たちと混同して見える姿ではない。気高くてきれいで、さつと匂いにおの立つ気がして、春の曙あけぼのかすみの霞の中から美しいかばざくら 桜の咲き乱れたのを見いだしたような気がした。夢中になつてながめる者の顔にまで愛あい嬌きょうが反映するほどである。かつて見たことのない麗人である。御簾みすの吹き上げられるのを、女房たちがおさえ歩くのを見ながら、どうしたのかその人が笑つた。非常に美しかった。草花に同情して奥へもはいらずに紫の女王がいたのである。女房もきれいな人ばかりがいるようであつても、そんなほうへは目が移らない。父の大臣が自分に接近する機会を与えないのは、こんなふうにに男性が見ては平静でありえなくなる

美^び貌^{ぼう}の継母と自分を、聡^{そう}明^{めい}な父は隔離するようにして親しませなかつたのであつたと思うと、中將は自身の隙^{すき}見^みの罪が恐ろしくなつて、立ち去ろうとする時に、源氏は西側の襖^{ふすま}子をあけて夫人の居間へはいつて来た。

「いやな日だ。あわただしい風だね、格子を皆おろしてしまふがよい、男の用人がこの辺にもいるだろうから、用心をしなければ」

と源氏が言っているのを聞いて、中將はまた元の場所へ寄つてのぞいた。女王は何かものを言つていて源氏も微笑しながらその顔を見ていた。親という気がせぬほど源氏は若くきれいで、美しい男の盛りのように見えた。女の美もまた完成の域に達した時であらうと、身にしむほどに中將は思ったが、この東側の格子も風

に吹き散らされて、立っている所が中から見えそうになったのに、恐れて身を退けてしまった。そして今来たように咳払いなどをしながら南の縁のほうへ歩いて出た。

「だから私が言ったように不用心だったのだ」

こう言った源氏をはじめて東の妻戸のあいていたことを見つけた。長い年月の間こうした機会がとらえられなかつたのであるが、風は巖も動かすという言葉に真理がある、慎み深い貴女も風のために端へ出ておられて、自分に珍しい喜びを与えたのであると中将は思ったのであった。家司たちが出て来て、

「たいへんな風力でございます。北東から来るのでございますから、こちらはいくぶんよろしいわけでございます。馬場殿と南の

釣つり殿どのなどは危険に思われます」

などと主人に報告して、下人げにんにはいろいろな命令を下していた。

「中将はどこから来たか」

「三条の宮にいたのでございますが、風が強くなりそうだと人が申すものですから、心配でこちらへ出て参りました。あちらではおひと一かた方かたきりなのですから心細そうになさいまして、風の音なども若い子のように恐ろしがつていられますからお気の毒に存じまして、またあちらへ参ろうと思ひます」

と中将は言つた。

「ほんとうにそうだ。早く行くがいいね。年がいつて若い子になるといふことは不思議なようでも実は皆そうなのだね」

と源氏は大宮に御同情していた。

騒がしい天気でございますから、いかがとお案じしておりますが、この朝臣あそんがお付きしておりますことで安心してお伺いはいたしません。

という挨拶あいさつを言づてた。途中も吹きまくる風があつて侘わびしいのであつたが、まじめな公子であつたから、三条の宮の祖母君と、六条院の父君への御機嫌きげん伺いを欠くことはなくて、宮中の御謹慎日などで、御所から外へ出られぬ時以外は、役所の用の多い時にも臨時の御用の忙しい時にも、最初に六条院の父君の前へ出て、三条の宮から御所へ出勤することを規則正しくしている人で、こんな悪天候の中へ身を呈するようなお見舞いなども苦勞とせず

した。宮様は中將が来たので力を得たようにお喜びになった。

「年寄りの私はまだこれまで経験しないほどの野分ですよ」

とふるえておいでになった。大木の枝の折れる音などもすごかった。家々の瓦の飛ぶ中を来たのは冒険であつたとも宮は言つておいでになった。はなやかな御生活をあそばされたことも皆過去のことになつて、この人一人をたよりにしておいでになる御現状を拜見しては無常も感ぜられるのである。今でも世間から受けておいでになる尊敬が薄らいだわけではないが、かえつてお一人子の内大臣のとする態度にあたたかさの欠けたところがあつた。

夜通し吹き続ける風に眠りえない中將は、物哀れな気持ちになつていた。今日は恋人のことが思われずに、風の中でした隙見すきみで

はじめて知るを得た継母の女王の面影が忘られないのであった。これはどうしたことか、だいそれた罪を心で犯すことになるのではないかと思つて反省しようとしてとめるのであったが、また同じ幻が目に見えた。過去にも未来にもないような美貌びぼうの方である、あれほどの夫人のおられる中へ東の夫人が混じつておられるなどということとは想像もできないことである。東の夫人がかわいそうであるとも中将は思つた。父の大臣のりつぱな性格がそれによつて証明された気もされる。まじめな中将は紫の女王を恋の対象として考えるようなことはしないのであるが、自分もああした妻がほしい、短い人生もああした人といつしよにいれば長生きができるであろうなどと思ひ續けていた。

明け方に風が少し湿気を帯びた重い音になって村むらさめ雨風な雨になつた。

「六条院では離れた建築物が皆倒れそうでございます」

などと侍が報じた。風が揉もみ抜いている間、広い六条院は大臣の住居すまい辺はおおぜいの人すまいが詰めているであろうが、東の町などは人少なで花散里はなちるさと夫人は心細く思つたことであろうと中将は驚いて、まだほのぼの白むしらころに三条の宮から訪ねたずに出かけた。横雨が冷ややかに車へ吹き込んで来て、空の色もすごい道を行きながらも中将は、魂が何となく身に添わぬ気がした。これはどうしたこと、また自分には物思ものいが一つふえることになつたのかと慄りつぜ然んとした。これほどあるまじいことはない、自分は狂氣したの

かともいろいろに苦しんで六条院へ着いた中將は、すぐに東の夫人を見舞いに行つた。非常におびえていた花散里をいろいろと慰めてから、家司けいしを呼んで損ねた所々の修繕を命じて、それから南の町へ行つた。まだ格子は上げられずに人も起きていなかったの
で、中將は源氏の寢室の前にあたる高欄によりかかつて庭をながめていた。風のあとの築山つきやまの木が被害を受けて枝などもたくさん折れていた。草むらの乱れたことはむろんで、檜皮ひわだとか瓦かわらとか
が飛び散り、立たて蒨じとみとか透すきがき垣かきとかが無数に倒れていた。わず
かだけさした日光に恨み顔な草の露がきらきらと光っていた。空
はすぐく曇つて、霧におおわれているのである。こんな景色けしきに對
して中將は何ということなしに涙のこぼれるのを押し込むよ

うに拭ふいて咳せき払いをしてみた。

「中将が来ているらしい。まだ早いだろうに」

と言つて源氏は起き出すのであつた。何か夫人が言つてゐるらしいが、その声は聞こえないで源氏の笑うのが聞こえた。

「昔もあなたに経験させたことのない夜明けの別れを、今はじめて知つて寂しいでしょう」

と言つてゐるのが感じよく聞こえた。女王の言葉は聞こえないのであるが、一方の言葉から推して、こうした戯れを言い合う今も緊張した間柄であることが中将にわかつた。格子を源氏が手ずからあけるのを見て、あまり近くいることを遠慮して、中将は少し後へ退のいた。

「どうだったか、昨晚伺ったことで宮様はお喜びになったかね」
「そうでございました。何でもないことにもお泣きになりますか
らお気の毒で」

と中将が言うのと源氏は笑って、

「もう長くはいらっしやらないだろう。誠意をこめてお仕えして
おくがよい。内大臣はそんなふうでないと私へおこぼしになった
ことがある。華美なきらきらしいことが好きで、親への孝行も人
目を驚かすようにしたい人なのだね。情味を持ってどうしておあ
げしようというようなことのできない人なのだよ。複雑な性格で、
非常な聡明そうめいさで末世の大臣に過ぎた力量のある人だがね。まあ
そう言えばだれにだって欠点はあるからね」

などと源氏は言うのであった。

「あの大風に中宮ちゆうぐう付きの役人は皆出て来ていたか、昨夜ゆうべのことが不安だ」

と言つて、源氏は中将を見舞いに出すのであった。

昨晚の風のきついところは どうしておいになりましたか。私は少しそのころから身体からだの調子がよろしゅうございませぬのでただ今はまだ伺われませぬ。

という挨拶あいさつを持たせてやったのである。そこを立ち廊の戸を通つて中宮の町へ出て行く若い中将の朝の姿が美しかった。東の対の南側の縁に立つて、中央の寝殿を見ると、格子が二間ほどだけ上げられて、まだほのかな朝ぼらけに御簾みすを巻き上げて女房た

ちが出ていた。高欄によりかかつて庭を見ているのは若い女房ばかりであった。打ち解けた姿でこうしたふうに出ていたりするとはよろしくなくても、これは皆きれいにいろいろな上着に裳^もまでつけて、重なるようにしてすわりながらおおぜいで出ているので感じのよいことであつた。中宮は童女を庭へおろして虫籠^{むしかご}に露を入れさせておいでになるのである。紫苑^{しおん}色、撫^{なで}子^{しこ}色などの濃い色、淡い色の袖^{あこめ}に、女郎^{おみなえし}花色の薄物の上着などの時節に合った物を着て、四、五人くらいずつ一かたまりになつてあなたこなたの草むらへいろいろな籠を持って行き歩いていて、折れた撫子の哀れな枝なども取つて来る。霧の中にそれらが見えるのである。お座敷の中を通過して吹いて来る風は侍従香の匂^{にお}いを含んでい

た。貴女きじよの世界の心憎さが豊かに覚えられるお住居すまいである。驚かすような気がして中将は出にくかったが、静かな音をたてて歩いて行くと、女房たちはきわだつて驚いたふうも見せず、皆座敷の中へはいつてしまった。宮の御入内ごじゆだいの時に童形どうぎようで供奉ぐぶして以来知り合いの女房が多くて中将には親しみのある場所でもあった。源氏の挨拶あいさつを申し上げてから、宰相の君、内侍ないしなどもいるのを知って中将はしばらく話していた。ここにはまたすべての所よりも気高けだかい空気があった。そうした清い気分の中で女房たちと語りながらも中将は昨日きのう以来の悩ましさを忘れることができなかつた。

帰つて来ると南御殿は格子が皆上げられてあつて、夫人は昨夜ゆうべ

気にかけてながら寝た草花が所在も知れぬように乱れてしまったのをながめている時であつた。中將は階段の所へ行つて、中宮のお返辞を報じた。

荒い風もお防ぎくださいますでしょうと若々しく頼みにさせていただいているのでございますから、お見舞いをいただきましてはじめて安心いたしました。

というのである。

「弱々しい宮様なのだからね、そうだったろうね。女はだれも皆こわくてたまるまいという氣のした夜だったからね、實際不親切に思おぼしめ召しただらう」

と言つて、源氏はすぐに御訪問をすることにした。直衣のうしなどを

着るために向こうの室の御簾みすを引き上げて源氏がはいる時に、短い几帳きちようを近くへ寄せて立てた人の袖口そでぐちの見たのを、女王にょおうであろうと思うと胸が湧わき上がるような音をたてた。困ったことであると思つて中将はわざと外のほうをながめていた。源氏は鏡に向かいながら小声で夫人に言う、

「中将の朝の姿はきれいじゃありませんか、まだ小さいのだが洗練されても見えるように思うのは親だからかしら」

鏡にある自分の顔はしかも最高の優越した美を持つものであると源氏は自信していた。身なりを整えるのに苦心をしたあとで、「中宮にお目にかかる時はいつも晴れがましい気がする。なんらの見識を表へ出しておいでになるのでないが、前へ出る者は気が

つかわれる。おおように女らしくて、そして高い批評眼が備わっているというようなかただ」

こう言いながら源氏は御簾から出ようとしたが、中將が一方を見つめて源氏の来ることにも氣のつかぬふうであるのを、鋭敏な神經を持つ源氏はそれをどう見たか引き返して来て夫人に、

「昨日きのう風の紛れに中將はあなたを見たのじゃないだろうか。戸があいていたでしょう」

と言うと女王は顔を赤くして、

「そんなこと。渡わた殿どののほうには人の足音がしませんでしたもの」と言っていた。

「しかし、疑わしい」

源氏はこうひとりごと独言を言いながら中宮の御殿のほうへ歩いて行つた。また供をして行つた中將は、源氏が御簾みすの中へはいつていゝる間を、渡殿の戸口の、女房たちの集まつていゝるけはいのうかがわれる所へ行つて、戯れを言つたりしながらも、新しい物思ひのできた人は平生よりもめいゝたふうをしていゝた。

そこからすぐに北へ通つて明石あかしの君の町へ源氏は出たが、ここでははかばかしい家司けいし風の者は来ていゝないで、下仕えの女中などが乱れた草の庭へ出て花の始末などをしていゝた。童女が感じのいゝ姿をして夫人の愛していゝる竜胆りんとうや朝顔がほかの葉の中に混じつてしまつたのを選り出えしていゝたわつていゝた。物哀れな氣持ちになつていゝて明石は十三絃げんの琴を弾ひきながら縁に近い所へ出ていゝた

が、人払いの聲がしたので、平常着ふだんぎの上へ棹さおからおろした小桂こうちぎを掛けて出迎えた。こんな急な場合にも敬意を表することを忘れない所にこの人の性格が見えるのである。座敷の端にしばらくすわって、風の見舞いだけを言って、そのまま冷淡に帰って行く源氏の態度を女は恨めしく思った。

おほかたの荻あしの葉過ぐる風の音もうき身一つに沁しむこちし
て

こんなことを口ずさんでいた。

源氏が東の町の西の対へ行った時は、夜の風が恐ろしくて明け

方まで眠れなくて、やっと睡眠したあとの寝過ごしをした玉たまかざ
 鬢らが鏡を見ている時であつた。たいそうに先払いの声をやさな
 いようにと源氏は注意して、そつと座敷へはいつた。屏風びょうぶ
 なども皆畳んであつて混雑した室内へはなやかな秋の日ざしがは
 いった所に、あざやかな美貌びぼうの玉たまかざら鬢らがすわつていた。源氏は
 近い所へ席を定めた。荒い野分の風もここでは恋を告げる方便に
 使われるのであつた。

「そんなふうなことを言つて、私をお困らせになりますから、私
 はあの風に吹かれて行つてしまいたく思いました」

と機嫌きげんをそこねて玉鬢たまかざらが言うと源氏はおもしろそうに笑つた。

「風に吹かれてどこへでも行つてしまおうというのは少し軽々し

いことですね。しかしどこか吹かれて行きたい目的の所があるでしょう。あなたも自我を現わすようになって、私を愛しないことも明らかにするようになりましたね。もつともですよ」

と源氏が言うと、玉鬘は思ったままを誤解されやすい言葉で言つたものであると自身ながらおかしくなくなって笑っている顔の色はなやかに見えた。海酸漿うみほおずきのようにふつくらとしていて、髪の間から見える膚の色がきれいである。目があまりに大きいことだけはそれほど品のよいものでなかった。そのほかには少しの欠点もない。中將は父の源氏がゆつくりと話している間に、この異腹の姉の顔を一度のぞいて知りたいとは平生から願っていることであつたから、隅すみの部屋へやの御簾みすが几帳きちょうも添えられてあるが、乱れ

たままになつてゐる、その端をそつと上げて見ると、中央の部屋との間に障害になるような物は皆片づけられてあつたからよく見えた。戯れていることは見ていてわかることであつたから、不思議な行為である。親子であつても懐ふところに抱きかかえる幼年者でもない、あんなにしてよいわけのものでないのにと目がとまつた。源氏に見つけられないかと恐ろしいのであつたが、好奇心がつのつてなおのぞいてゐると、柱のほうへ身体からだを少し隠すように姫君がしているのを、源氏は自身のほうへ引き寄せていた。髪の毛が寄つて、はらはらとこぼれかかつていた。女も困つたようなふうはしながらも、さすがに柔らかかに寄りかかつてゐるのを見ると、始終このなれなれしい場面の演ぜられてゐることも中将に合がてん点され

た。悪感おかんの覚えられることである、どういうわけであろう、好色なお心であるから、小さい時から手もとで育たなかつた娘にはあつた心も起こるのであろう、道理でもあるがあさましいと真相を知らない中将にこう思われている源氏は気の毒である。玉鬘は兄弟であつても同腹でない、母が違ふと思えば心の動くこともあろうと思われる美貌であることを中将は知つた。昨日見た女によおう王よりは劣つて見えるが、見ている者が微笑ほほえまれるようなはなやかさは同じほどに思われた。八重の山やまぐき吹の咲き乱れた盛りに露を帯びて夕映ゆうばえのもとにあつたことを、その人を見ていて中将は思ひ出した。このごろの季節のものではないが、やはりその花に最もよく似た人であると思われた。花は美しくても花であつて、ま

たよく乱れた蕊しべなども盛りの花といっしよにあつたりなどするものであるが、人の美貌はそんなものではないのである。だれも女房がそばへ出て来ない間、親しいふうに二人の男女は語っていたが、どうしたのかまじめな顔をして源氏が立ち上がった。玉鬘が、

吹き乱る風のけしきにをみなへしを女郎花萎れしぬべきこちこそすれ

と言った。これはその人の言うのが中将に聞こえたのではなくて、源氏が口にした時に知ったのである。不快なことがまた好奇心を引きもして、もう少し見きわめたいと中将は思ったが、近くにいたことを見られまいとしてそこから退のいていた。源氏が、

「しら露に靡かましかば女郎花荒き風にはしをれざらまし

弱竹なよたけをお手本になさい」

と言つたと思つたのは、中将の僻耳ひがみみであつたかもしれぬが、

それも気持ちの悪い会話だとその人は聞いたのであつた。

花散里はなちるさとの所へそこからすぐに源氏は行つた。今朝けさの肌寒はださに

促されたように、年を取つた女房たちが裁ち物などを夫人の座敷
でしていた。細櫃ほそびつの上で真綿をひろげている若い女房もあつた。

きれいに染め上がった朽ち葉色の薄物、淡紫うすむらさきのでき上がりの

よい打ち絹などが散らかつている。

「なんですこれは、中将のしたかさね下襲つぼせんざいなんですか。御所の壺前裁つぼせんざいの秋草の宴なども今年はだめになるでしょうね。こんなに風が吹き出してしまつてはね、見ることも何もできるものでないから。ひどい秋ですね」

などと言いながら、何になるのかさまざまの染め物織り物の美しい色が集まつているのを見て、こうした見立ての巧みなことは南の女王にも劣つていない人であると源氏は花散里を思った。源氏の直衣のうしの材料の支那しなの紋綾もんあやを初秋の草花から摘んで作った染料で手染めに染め上げたのが非常によい色であつた。

「これは中将に着せたらいい色ですね。若い人には似合うでしょう」

こんなことも言つて源氏は歸つて行つた。

面倒めんどうな夫人たちの訪問の供を皆してまわつて、時のたつたこ

とで中將は気が気でなく思いながら妹の姫君の所へ行つた。

「まだ御寢室にいらつしやるのでございますよ。風をおこわがりになつて、今朝けさはもうお起きになることもおできにならないのでございます」

と、乳母めのとが話した。

「悪い天気でしたからね。こちらで宿直とのいをしてあげたかったのだが、宮様が心細がつていらつしやつたものですからあちらへ行つてしまったのです。お雛ひな様の御殿はほんとうにたいへんだつたでしょう」

女房たちは笑つて言う、

「扇の風でもたいへんなのでございますからね。それにあの風でございましょう。私どもはどんなに困ったことでしょう」

「何でもない紙がありませんか。それからあなたがたがお使いになる硯すずりを拝借しましょう」

と中将が言つたので女房は棚たなの上から出して紙を一巻き蓋ふたに入れて硯といっしょに出してくれた。

「これはあまりよすぎて私の役にはたちにくい」

と言いながらも、中将は姫君の生母が明石夫人あかしであることを思つて、遠慮をしすぎる自分を苦笑しながら書いた。それは淡紫の薄うす様ようであつた。丁寧に墨をすつて、筆の先をながめながら考え

て書いている中將の様子は艶えんであつた。しかしその手紙は若い女房を羨望せんぼうさせる一女性にあてて書かれるものであつた。

風騒ぎむら雲迷ふ夕べにも忘るるまなく忘れぬ君

という歌の書かれた手紙を、穂の乱れた刈かる萱かやに中將はつけていた。女房が、

「交野かたのの少將は紙の色と同じ色の花を使ったそうでございますよ」と言つた。

「そんな風流が私にはできないのですからね。送つてやる人だつてまたそんなものなのですからね」

中將はこうした女房にもあまりなれなれしくさせない溝みぞを作つて話していた。品のよい貴公子らしい行為である。中將はもう一通書いてから右馬助うまのすけを呼んで渡すと、美しい童わらわぎむらい侍や、ものなれた随身の男へさらに右馬助は渡して使いは出て行つた。若い女房たちは使いの行く先と手紙の内容とを知りたがつていた。姫君がこちらへ来ると言つて、女房たちがにわか立ち騒いで、きちよう几帳の切れを引き直したりなどしていた。昨日から今朝にかけて見た麗人たちと比べて見ようとする氣になつて、平生はあまり興味を持たないことであつたが、妻戸の御簾みすへ身体からだを半分入れて几帳ほころの綻びからのぞいた時に、姫君がこの座敷へはいつて来るのを見た。女房が前を往ゆき来するので正確には見えない。淡紫の着

物を着て、髪はまだ着物の裾すそには達せず、末のほうがわざとひろげたようになっている。細い小さい姿が可憐かれんに思われた。一昨年ごろまでは稀まれに顔も見たのであるが、そのころよりはまたずっと美しくなつたようであると中将は思った。まして妙齡になつたならどれほどの美人になるであらうと思われた。さきに中将の見た麗人の二人を桜と山吹にたとえるなら、これは藤ふじの花といつてよいようである。高い木にかかつて咲いた藤が風になびく美しさはこんなものであると思われた。こうした人たちを見たいだけ見て暮らしたい、継母であり、異母姉妹であれば、それのできないのかえつて不自然なわけであるが、事實はそうした恨めしいものになつていふと思うと、まじめなこの人も魂がどこかへあこがれて

行つてしまふ気がした。

三条の宮へ行くと宮は静かに仏勤めをしておいでになつた。若い美しい女房はここにもいるが、身なりも取りなしも盛りの家の夫人たちに使われている人たちに比べると見劣りがされた。顔だちのよい尼女房の墨染めを着たのなどはかえつてこうした場所にふさわしい気がして感じよく思われた。内大臣も宮を御訪問に来て、灯^ひなどをともしてゆつくりと宮は話しておいでになつた。

「姫君に長く逢^あいませぬね。ほんとうにどうしたことだろう」とお言い出しになつて、宮はお泣きになつた。

「近いうちにお伺わせいたします。自身から物思いをする人になつて、哀れに衰えております。女の子というものは實際持たなく

ていいものです。何につけかにつけ親の苦勞の絶えないもので
す」

内大臣はまだあの古い過失について許し切っていないように言
うのを、宮は悲しくお思いになって、望んでおいでになることは
口へお出しになれなかつた。話の続きに大臣は、

「ものにならない娘が一人出て来まして困っております」
と母宮に訴えた。

「どうしてでしょう。娘という名がある以上おとなしくないわけ
はないものですが」

「それがそういかないのです。醜態でございます。お笑いぐさ
お目にかきたいほどです」

と大臣は言っていた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：伊藤時也

2003年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

野分

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>